

台湾の大学入試事情

研究開発部試験方法研究部門 岩 坪 秀 一

1. はじめに

平成7年度は、国際学術研究「大学入試における能力評価システムの実態と改善についての国際比較研究」(研究代表者：坂元 昂大学入試センター副所長)の最終年度に当たり、主としてアジア諸国の大学入学者選抜制度を調査することになっていた。その一環として、平成7年9月23日から30日まで台湾に出張し、当地の大学入試制度の実地調査を行った。

台湾調査に参加する直接のきっかけは、平成7年7月に東京代々木のオリンピック記念青少年総合センターで開催された国際シンポジウム「21世紀に向けての大学入試」であった。台湾から報告者として黄炳煌教授が見えていた。教授の講演を拝聴し、その後、個人的に直接お話を伺って、台湾では関係者が非常な熱意をもって大学入試制度改革に取り組んでいることを知った。そこで、その実態をこの目で是非確かめてみたいと思うに至ったのである。出張期間中、台北市にある大学入

試センター(中国語では大学入学考試中心)主催の日本、台湾、韓国の大学入試制度の比較に関する国際セミナーが開かれ、それに参加することもできた。(セミナーは9月25、26日の両日。日本の大学入試制度について坂元副所長の基調講演があった。)研究開発部は、台湾大学入試センターと数年来交流しており、セミナーを機会に研究者の方々と十分に意見を交換できたのも有り難かった。

台湾訪問は短期間であったが、得られた情報をもとにして台湾の大学入試の現状の概略を紹介したい。

2. 共通試験

台湾の大学入学者選抜は、共通試験(中国語では「聯考」)によって行われている。この制度は、1954年に導入され、これまでに制度内でいくつかの改革を経てきているが、後に触れるように目下、抜本的見直しが行われている。

選抜は、共通試験(試験科目は6から7科目)の成績のみで行われている。

共通試験受験者は、試験終了後20日ほどたってから個々の科目について成績結果を知らされ、それに基づいてどの大学・学部・学科に進みたいか入学志望の順位を付けて申請する。その際、大学・学部・学科によっては、その専門性に依りて1科目から3科目程度まで、その得点を1.5倍ないし1.25倍するところがあり、また、特定科目の最低得点を提示してそれを下回ると他の科目成績がいかに良くても不合格になる場合もあるので、十分な検討が必要となる。1994年における平均志望学科数は、41だった（最高50学科まで申請可能）。志望学科が5学科以下である人数は、進学希望者の1.2%（700人強）にしかならない。選抜は、まず共通試験の成績順位、次いで入学志望順位に基づいて一律に行われる。そのため、不本意入学の増加、大学・学部・学科の序列化、受験競争の過熱化などが顕在化しており、正に、これら諸問題の解決のために、共通試験改革が目指されたのである。

表1. 共通試験の試験科目

進学先		文, 法, 経	理甲, 工甲	理乙, 工乙, 農乙, 医	農
試験科目	指定	数学1 歴史, 地理	数学2 物理, 化学	数学2 物理, 化学, 生物	数学2 化学, 生物
	共通	国語, 英語, 三民主義			

共通試験の試験科目は、表1に示した通りである。表中の「理甲」は、物理学、化学、地球科学など理学部系、「理乙」は、生物学系、「工甲」は、電気工学、情報工学、機械工学などの工学系、「工乙」は、土木工学、農業機械工学など、「農乙」は、農業化学など、の専門分野に進学を希望するグループを指す。また、「数学1」は、文科系数学、「数学2」は、理科系数学である。共通科目に、孫文の「三民主義」が入っているのは、いかにも台湾らしい。

共通試験の実施は、毎年、出題も含めて特定の大学が担当する。出題の形式は、論述式と客観式とからなり、論述式が配点に占める割合は、表2の通りである。採点はすべて人手による。

1994年度の統計によれば、共通試験利用大学数は、国立大学25校、私立大学25校の計50校（全大学数52校）で、ほとんどの大学が参加した。受験志願者数は、124,786名。普通高校出身が95.9%を占め、残りは職業高校などの出身者であった。性別から見ると、男

表2. 論述式の配点比率

科目	配点比率	科目	配点比率
三民主義	40%	物理	50
国語	40	化学	36
英語	40	生物	40
数学1	80	歴史	30
数学2	80	地理	24

女がほぼ均衡しているのが特徴である（男子52%、女子48%）。合格者は55,343名で、受験志願者総数の約44%に当たる。

受験料は、7科目受験まで邦貨にして4,000円程度であり、実技試験については別途支払わなければならない。共通試験受験志願の締切は5月下旬、共通試験は、7月1日から3日までの3日間（実技試験は7月7日から10日まで）。成績発表は、7月20日であった。受験者は自分の成績をもとに、どの大学・学部・学科に進学を希望するか順位を記入した「志願表」を提出する。前記のように最高50学科まで希望できる。「志願表」提出期間は7月28日と29日の2日間であった。こうして提出された「志願表」をもとに振り分けが行われ、8月9日に合格発表があった。新学期は毎年9月から始まる。

3. 共通試験の改革

台湾の教育関係者が、この共通試験

を主として批判してきた点は以下の通りである。

- (1) 教育関係者の立場から
 - 1点を争う知識偏重型の試験であり、思考力や創造力を測っているとは言えない。
 - 有名大学への合格率が高い高校を目指して受験競争が激しい。など。
 - (2) 受験者の立場から
 - 不本意入学を避けたい。
 - 受験機会が1回しかない。など。
 - (3) 大学の立場から
 - 大学の序列化がますます助長される。
 - 大学が本当に取りたい学生を選抜しにくい。
 - 共通試験実施担当大学の負担が大き過ぎる。など。
 - (4) 高校の立場から
 - 高校教育をゆがめている。など。
- こうした批判を受けて、1989年7月に、大学入試改善のための調査・研究を行う機関として、大学入試センターが設立された。そして同年12月には共通試験改革のための研究委員会（委員長：黄炳煌教授）が発足し、精力的な調査・研究を開始した。
- その成果が、1999年から導入される

ことになった新しい共通試験制度である。主な改善点の概略は以下の通り。

- (1) 大学の専門分野によって共通試験成績の利用の仕方を多様化する（ある科目の成績は資格試験として扱うなど）。大学側が取りたい学生を選びやすくするためである。
- (2) 従来の選抜方式であった、最初に成績順、次に進学志望順で振り分けるやり方を改めて、まず進学志望順、次いで成績順で振り分ける。不本意入学の解消を目的とした措置である。
- (3) 成績を等級（0から15まで）に分ける。専門分野と科目によっては、「合」「否」だけで判定して、1点刻みの成績に一喜一憂しなくてもすむようにする。

台湾大学入試センターは、1996年から現行の共通試験の実務を引き受けることになった。さらに、1994年、新しい共通試験実施に向けての前段階として、推薦学力試験を導入した。これは、我が国の推薦入学とは異なったものである。各高校から推薦された生徒集団について、大学入試センターが出題する客観式共通試験と、各大学・学部が独自に行う選抜試験とを課して、入学者を選抜する制度である。推薦人数は、各大学・学部ごとに15学級未満の規模の高校から1名、15学級以上の高校から2名となっている。大学入試センター出題の試験科目は現行の共通試験

と同じであるが、形式はマークシート方式である。かつて1994年に台湾大学入試センターを訪れたときに、米国製の光学式マーク読み取り機械を見学することができた。当時、2台稼働していたが、我が国の大学入試センターの機種に比べると、処理枚数がずっと少ないこともあり、かなり可愛らしいものであった。

推薦学力試験の評判が大変良かったことは、1994年に7,404名であった受験者数が、翌1995年には一挙に22,596名に増えたことから分かる。

4. おわりに

台湾は、1980年代後半ころから高度成長期に入った。台北の通りを歩き交う若者たちの服装も日本とほとんど変わらず、顔も我々と似ていることもあって外国に来ている気がしなかった。

入試への思い入れの強さも、我が国以上のものを感じた。日本、韓国も含めて、かつて儒教圏にあった東アジアの国々は、禁欲倫理に根ざした懸命の努力をすれば、必ず自分の望みを達成できるのだ、という潜在的信念があるのではないか。このある意味での美德を、いかにして生産的な方向に振り向けていったらよいか、その1つの試みとして台湾の大学入試の将来は、我が国にとっても大いに参考になるものと思われる。